HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第6章 エスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験
Author(s)	新藤, こずえ
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 33, 99-124
Issue Date	2015-05-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59150
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_33_99-124.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第6章　エスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験

新藤こずえ｜立正大学社会福祉学部講師

はじめに

エスニック・アイデンティティは民族集団内で共有される経験によって後天的に付与されるものである（Giddens 2001 = 2004）。したがって、エスニック・アイデンティティが醸成されるプロセスを検討する際には、ライフコースにおける時間的経過を考慮する必要がある。そこで本章では、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティを、過去・現在・今後の時間軸に沿って検討する。方法としては、インタビュー結果全体から、過去・現在・今後のそれぞれの時点で、アイヌであることの自己意識を「肯定的」「否定的」「どちらでもない」の３群に分け、エスニック・アイデンティティの変容を考察する。その際、世代によってアイデンティティに関わる経験が異なることをふまえ、年齢層ごとに分析を行う。また、アイヌ文化の経験がアイヌとしての意識に影響を与えるという観点から、アイヌ文化の経験について、アイヌ協会やアイヌ文化保存会などの組織に所属して実践するアイヌ文化と、日常生活の中で実践されているアイヌ文化に分けて検討を行う。さらに、今後のエスニック・アイデンティティについて、積極的な意識である者とそうでない者に分け、それぞれがいかなる認識にもとづいているのか検討を行う。

本調査は白糠町で実施したものであるが、これまでに同内容の調査を実施した札幌市・むかわ町の分析（小内・長田 2012）、新ひだか町の分析（新藤 2013）、伊達市の分析（新藤 2014）を適宜参照し、アイヌの人々のエスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験について検討する。

第１節　エスニック・アイデンティティの概要

第１項　過去と現在の意識

自身がアイヌであることについて、どのような意識を有しているのか、各人のインタビュー結果全体にもとづいて、過去と現在の意識をそれぞれ次の３つの群に分類した。

まず、過去の意識について、①「肯定的である」は、「アイヌであることに誇りを感じられる経験をした」「アイヌの文化や伝統を積極的に実践していた」など、以前からアイヌであることに肯定的な人々の意識である。②「否定的である」は、「自身がアイヌであることを隠していた」「アイヌであることによって非常につらい経験をした」という人々の意識である。③「どちらでもない」は、「自身がアイヌであることを知らなかった」「アイヌの文化や伝統に触れたことがなかった」「意識したことがない」という人々の意識である。結果としては、「どちらでもない」が 64.6％であり、「否定的である」が 25.0％、「肯定的である」が 10.4％であった。「肯定的である」が、伊達では 12.8％、新ひだかでは 12.3％、札幌・むかわでは 10.7％であったことと比べると、白糠では「肯定的である」という意識を持っている人は少ないほうである。一方で「否定的である」という意識であった者の割合が最も高かった（表６－１）。

次に、現在の意識について、①「肯定的である」は、「アイヌであることに誇りを持っている」「アイヌの文化や伝統の実践や学習をしている」など、現在アイヌであることに肯定的な人々の意識である。②「否定的である」は、「アイヌであることに嫌悪感を持っている」「ネガティブなイメージがある」など、アイヌであることに否定的な人々が持っている意識である。③「どちらでもない」は、「自身がアイヌであることをとくに意識しない」「アイヌであることをあまり考えたことがない」という人々の意識である。結果としては、白糠では、「肯定的である」が 56.3％と最も多く、ついで「どちらでもない」が 41.7％、「否定的である」が 2.1％であった。「肯定的である」が、伊達では 14.9％、2.1％、新ひだかでは 49.1％、札幌・むかわでは 40.2％であったことと比べると、白糠では、アイヌであることに対して肯定的である意識を持つ者が多い（表６－２）。

なお、インタビューを実施した 48 人のうちアイヌの養子となった和人（１人）や配偶者がアイヌである和人（アイヌか和人か不明であるアイヌの人の配偶者１人を含む）（10 人）の場合もアイヌの人々と同様の観点から分析した。

表６－１ アイヌであることに対する過去の意識　　単位：人、％

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
白糠	5	10.4%	12	25.0%	31	64.6%	48	100.0%
伊達	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	47	100.0%
新ひだか	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%
札幌・むかわ	45	40.2%	7	6.3%	60	53.6%	112	100.0%

表６－２ アイヌであることに対する現在の意識　　単位：人、％

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
白糠	27	56.3%	1	2.1%	20	41.7%	48	100.0%
伊達	7	14.9%	1	2.1%	39	83.0%	47	100.0%
新ひだか	28	49.1%	1	1.8%	28	49.1%	57	100.0%
札幌・むかわ	45	40.2%	7	6.3%	60	53.6%	112	100.0%

白糠におけるアイヌの人々の現在の意識を年齢層別に見たものが表６－３である。「肯定的である」が最も多いのは老年層（60.0％）であるが、壮年層（50.0％）、青年層（56.3％）も同程度に高い割合である。いずれの年齢層も、伊達（老年層 27.8％、壮年層 42.3％、青年層 33.3％）、新ひだか（老年層 42.3％、壮年層 42.3％、青年層 33.3％）、札幌・むかわ（老年層 58.5％、壮年層 35.7％、青年層 20.7％）と比較しても、「肯定的である」者の割合が高い。

表６－３　アイヌであることに対する現在の意識　　単位：人、％

	肯定的である		否定的である		どちらでもない		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	9	56.3%	1	6.3%	6	37.5%	16	100.0%
壮年層	6	50.0%	0	0.0%	6	50.0%	12	100.0%
老年層	12	60.0%	0	0.0%	8	40.0%	20	100.0%
合計	27	56.3%	1	2.1%	20	41.7%	48	100.0%

アイヌであることに対する過去と現在の意識は表６－４のとおりである。「肯定的である」者27人のうち、過去からそうであった者は４人であり、過去には「どちらでもない」「否定的」という意識であった者が大半を占めていた。一方、「どちらでもない」者20人のうち、過去から同様の意識であった者は15人であった。過去に「否定的」であった者は12人であったが、現在も同様の意識である者は１人だけであった。したがって、過去に「否定的」であった者の大半が、現在は「肯定的」か「どちらでもない」という意識に変容したということである。意識の変容があった者が多く見られる一方で、過去から「どちらでもない」者の意識は、現在もそれほど変容していない。次節では、意識の変容がどのような経験によってもたらされたのか、あるいは、意識の変容がもたらされなかったのはなぜか検討を行う。

表６－４　アイヌであることに対する過去と現在の意識　　単位：人、％

世代		現在											
		肯定的である				否定的である				どちらでもない			
青年層（16人）	過去	肯定的	3	9	過去	肯定的	0	1	過去	肯定的	1	6	
		否定的	0			否定的	1			否定的	0		
		どちらでもない	6			どちらでもない	0			どちらでもない	5		
壮年層（12人）		肯定的	0	6		肯定的	0	0		肯定的	0	6	
		否定的	3			否定的	0			否定的	1		
		どちらでもない	3			どちらでもない	0			どちらでもない	5		
老年層（20人）		肯定的	1	12		肯定的	0	0		肯定的	0	8	
		否定的	4			否定的	0			否定的	3		
		どちらでもない	7			どちらでもない	0			どちらでもない	5		
合計（48人）		肯定的	4	27		肯定的	0	1		肯定的	1	20	
		否定的	7			否定的	1			否定的	4		
		どちらでもない	16			どちらでもない	0			どちらでもない	15		

第２項　年齢層によるアイヌとしての意識

（１）青年層

青年層16人のうち９人は現在、「肯定的」である意識を持っている。その９人のうち、過去から「肯定的」な意識である者は３人であり、６人は肯定的でも否定的でもない「どちらでもない」意識を持っていた。また、現在、「どちらでもない」意識を持っている６人のうち５人は、過去から「どちらでもない」意識であり、１人は「肯定的」であった。過去も現在も「否定的」な意識である者は１人であった。まず、現在において「肯定的」な意識を持っている人の語りを検討していく。

（過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」な意識である者）

・物心ついた頃からもう、婆ちゃんにくっ付いて踊りを踊ったりとかそういうことあったから、自分がアイヌだっていうのはちっちゃい時からわかってたこと。（青年層・男性）

・自分がアイヌだなと思ったのは、学校上がる前にはもうわかってたかな（中略）母親にもそうだし、ばあちゃんもそうだけど、いろいろアイヌの祭り（中略）結構連れて行かれたから、そういうのもあって、全然アイヌであることを不思議はなくってこれたですね。自分もアイヌだと思ってたし。（青年層・女性）

・（現在は）道内の地、海外で、そういう交流事業もやってるし、あと、小学校の方で出前講座って、

アイヌ文化のね、それの講師でも呼ばれることはあります。（踊りのほかにも）アイヌ料理を小学校で作って教えたりとか、アイヌ楽器のムックリっていうのを講習で教えたり、歌を教えたりとか。（青年層・女性）

・それ（白糠アイヌ協会の行事）に自分が初めて参加したのが７年くらい前で（中略）それまで、一切かかわっていなかったんですけど。ひいおじいちゃんが、けっこう有名な人らしいんですよね（中略）自分がアイヌ関係のことに興味を持って、初めて、自分のひいじいちゃんがそういうことをしていたのを知ったので。（青年層・男性）

・（アイヌの）お祭り自体は結構、慣れ親しんでいるから。でも、実際にちゃんと参加していないからわからないんですけど。アイヌで良かったなみたいな感じで。（青年層・女性）

このように、自身がアイヌであることについて、過去には「どちらでもない」意識であったが、現在は「肯定的」である者には、幼少期から踊りや楽器などのアイヌ文化に親しんできた者、青年期以降になって自らの先祖が「けっこう有名な人」であることがわかり、アイヌについて興味を持つようになった者、アイヌのお祭りを見て「アイヌで良かった」という気持ちになった者が見られた。過去にはアイヌであることでいじめや差別を受けた者もいる。しかし､その経験はエスニック・アイデンティティを決定的に否定的なものにするには至っていない。

・「アイヌだ」の「毛深いだ」のさ言われたけど､別に泣いて帰ってきたことはそんなないかな（中略）やり返すっていっても､暴力的でしたけどね（中略）どうすればいいんだかわからないから、殴りかかるしかなくて。しかも男の子にね。（青年層・女性）

・ふつうの人間に生まれたかったっていうことはありましたね。だからこういう踊りをやっていることとかは、それこそ小さい頃は何も考えないで、これが当たり前っていうような感じでずっと思ってたけど（中略）同級生たちが「あいつはアイヌの踊りもやってるし、あいつはアイヌなんだ」って言って、そこからアイヌのいじめみたいなのはありましたけど。（青年層・女性）

・その血を恨んだこともありつつ、今どうだって言ったらそういう血に生まれてきてよかったと思いつつ､両方ですかね。（良かったって思うのは､具体的にどういう時に？）やっぱり普通の人じゃ経験できないことを経験できたりとかっていうのもあるし、一般人だったら一般人なりのいじめとかもなく。つらいことになればやっぱり一般人とは違うのかなって思わされることがあったりとかするけど、でもそれをきっかけに今があると、そうやっていじめられた分ちょっとは自分は強くなれただろうし、いじめられた人の気持ちもわかるし、普通の人たちと違ってアイヌ民族っていうのでこんな楽しい踊りをできたとか考えると、よかったなって思う感じですね。（青年層・女性）

いじめや差別への対応としては、ひとつには、殴りかかることによって「やり返す」ことができたというものがある。いまひとつは、小さいころから「何も考えないで、これが当たり前っていうような感じ」で続けてきたアイヌの踊りが、肯定的なエスニック・アイデンティティを醸成することにつながっており、いじめられるという否定的な経験を上回っていることがあげられる。アイヌの踊りはいじめのターゲットにされるものにもなっているものの、アイヌであることによって「普

通の人たちと違ってアイヌ民族っていうのでこんな楽しい踊りをできた」こと、また、それらを道内外や海外でも披露するという経験が現在の肯定的なアイデンティティに結びついていると考えられる。

（過去も現在も「肯定的」な意識である者）
・昔は（アイヌ語の）弁論大会とかに出てたんですけど。（青年層・女性）
・よく小学校とかに教えに行ってたんですよね。で、ちっちゃい子たちが一緒にムックリとかやってて、鳴らしたり出来たりとかしたらすごい嬉しがってくれてて。それがとってもなんか嬉しかったなって自分の中で思いますね。楽しんでくれてるのが良かったですね。やっぱり。（青年層・女性）
・中学校入ったぐらいかな。「自分はすごい事をしてるぞ。アイヌの活動をしてるんだ。」って思った（中略）いろんなところに呼ばれるようになったから。自分が先生としての…先生っていうか、「こういう事もしてるんだよ」って教えるのをやって、「あ、自分て、なんかすごい事をやってるんだ。わーっ。」みたいな。（青年層・女性）
・（いじめられて）やっぱり先生に電話して。それこそ、うちの祖母ちゃんも怒っちゃってさ、校長先生の部屋に行って、何か言ってくれたんだわ。（中略）朝行けば朝礼みたいのあるしょ。その時に、いきなり祖母ちゃんたち入ってきてさ、衣装着てね。学校で踊ったんだ。学校のステージの上で。したっけみんな踊った後に、今度、マイクで「〇〇くん、上がってきて下さい」って。「へ？」と思って。それで、俺も踊ったんだわ、弓の舞ね。弓の舞、踊ってからはなんも。それこそ一切言ってこなくなった。「逆にすごいね、よく踊ったね」みたいな。（青年層・男性）
・そうですね。そんなんじゃない。カッコいいとかそういうのじゃないんですけどね、わたし的には。これが普通なのか。（青年層・女性）

過去も現在も「肯定的」な意識である者には、アイヌであることで差別を受けたことが「まったくない」（青年層・女性）者がいる一方で、過去に「どちらでもない」あるいは「否定的」な意識であった者と同様に、いじめられるなど差別をされた経験を有している者もいる。しかし、アイヌ語の弁論大会への出場、小学校の全校生徒の前で「弓の舞」を披露する、小学校でムックリを教えるなど、その経験を乗り越える、あるいは人並み以上に秀でる体験をしていた。そのことが、「自分はすごい事をしてるぞ。アイヌの活動をしてるんだ」という強い肯定感を生み出している。共通しているのは、子ども期に、アイヌであることに直面化し、肯定的なアイデンティティを持つことが自然であると思い至る経験をしていることである。

（過去も現在も「否定的」な意識である者＝青年層・男性）
・やっぱり嫌な思いしかないですね。小学校…一番小学校の時が酷かったかな。
・民族の衣装だね。あれを親たちが身にまとってるのを見た時。若干ショックだったの。なんでそんなの着てるのかなって。子どもの頃びっくりした。うん。本当はね。その衣装も身にまとってそういうのに参加しなきゃならないんだけど。極力そういうのは着たくないから。
・こういうのをやっぱり子どもの時に見たり、たまに体験したりはしたけども、やっぱり同級生たちには見られたくないっていうか。そういう、今で言ういじめの対象になるもんね。話題にされ

て終わりだから。継承したくないっていう。大事な事なんだかもしれないけど。

過去も現在も「否定的」な意識である者（１人のみ）は、過去も現在も「肯定的」な意識である者と対照的な経験をしていた。子どもの頃から民族衣装を着用するなど、家族とともにアイヌとして活動する機会がありながら、そういった経験は「ショックだった」「極力そういうのは着たくない」という否定的な意味づけしかなされていない。いじめの対象になってしまい、「嫌な思い」しかなく、その思いは「もう消せない」ものであるため、アイヌ文化を「継承したくない」という。一方で「こんなのがなかったら（いじめられなかったら）みたいなのはずっと思ってる」という感情も残されている。

（過去も現在も「どちらでもない」意識である者）

・母方の祖母がアイヌの血筋だということがわかっているが、他はまったくわからない。（青年層・女性）
・小学校の時は楽しくてやっていたけど、ある程度物心がついてあれだった時は、嫌だなと思ったこともあるし、それに対していじめもあったしね。一言で簡単には言えないね。やっぱり今までやってきたことに対して、いいか悪いかというのは。（青年層・女性）
・（アイヌ民族だと意識することは）ないな。どういうふうに思うんだろうね。それって、私が日本人だと思うことと同じぐらいかな、感覚的に。だからといって、自分で日本人だと思うことはある？　要は、そう聞かれていることと同じことでしょう。私は外人だよとかいう人とか、わからなくない？（中略）ほんとにアイヌのことを一生懸命小さい頃からやってきている、もっと勉強している人はたくさんいるから。その中で、自分がアイヌだよと思うことがあるという人はいるかもしれないけど、私はそこまでアイヌのことを意識してやっているという感覚はないから、あまりないかな。（中略）特別感はないよということ。（青年層・女性）
・結構ちっちゃいころから（アイヌの踊りや楽器を）やってたから（中略）お母さんもやってるし、おばあちゃんもやってるし、みんなやってると思って。自分も別にやめたいとか思ってないしね、別にいいと思います。（青年層・女性）

過去も現在も「どちらでもない」意識である者には、自分がアイヌであることは知っているが、アイヌであることにかかわる活動にはまったく携わっていない者、子ども期から踊りなどのアイヌ文化に自然に親しんできたため、とりわけ意識をしないという意味での「どちらでもない」という意識の者、「アイヌだからどうだとか、そういう考えかたはやめてほしい」という意識から「どちらでもない」という意識を持つ者（和人配偶者）が含まれる。子ども期からアイヌの踊りや楽器に親しんできた者であっても、「ほんとにアイヌのことを一生懸命小さい頃からやってきている、もっと勉強している人はたくさんいる」という思いが、積極的なエスニック・アイデンティティに結びつかず「どちらでもない」意識を持つ背景にあると考えられる。

（過去は「肯定的」であったが現在は「どちらでもない」意識である者＝青年層・男性）

・物心ついた時にはもうアイヌっていう言葉は知ってるし、自分もアイヌなんだって思ってたし、

父さんもその上の人たちも、その上の人たちもアイヌなんだって思ってたから。文化継承っていうのも別になかったな…踊りの事はいつの間にか覚えてたし。

・生まれてからずっと阿寒湖にいて、アイヌの事やってるのが当たり前だったから。意識するって…そういう変な考え方をした事ない。ただ普通に、アイヌ民族の行事とか、カムイノミとか、そういう事をやってると「ああ、俺もアイヌの一員なんだな」と思うけど。

過去は「肯定的」であったが現在は「どちらでもない」意識である者（１人のみ）は、子ども期から「アイヌの事やってるのが当たり前」という環境で育った。そのため、アイヌであることをとりわけ「意識する」ということは「変な考え方」に感じられている。

以上のように、しかし、現在は白糠町に在住しているため、子ども期に比べアイヌ文化に触れる機会は減少している。青年層において過去から現在にかけて、エスニック・アイデンティティの変容が見られた者は７人であった。

（２）壮年層

壮年層 12 人のうち６人は現在、アイヌであることに「肯定的」な意識を持っている。しかし、そのなかで過去から「肯定的」な意識を持っている者はおらず、過去には「否定的」「どちらでもない」という意識を持っている者が３人ずつであった。また、現在、アイヌであることに「どちらでもない」意識である者は６人であり、そのうち１人は過去には「否定的」な意識から変化した者であるが、５人は過去から「どちらでもない」意識を持っていた。過去も現在も「否定的」な意識である者はいなかった。また、過去から「肯定的」である者はいなかった。つまり、現在「肯定的」である者は、「否定的」か「どちらでもない」から変容してきた者であり、意識の変容がなかった者は「どちらでもない」意識の５人である。

（過去は「否定的」な意識であったが現在は「肯定的」な意識である者）

・やっぱり白糠にいたらアイヌが下に見られる中で、阿寒湖はアイヌ民族を売りとしていると言ったらおかしいけど、そういう観光地だから、やっぱり自分でいられるというか、恥ずかしがらないでいられる場所でしたね。（壮年層・女性）

・毛深いんだねとか、濃い顔。それはしょっちゅうどこに行っても。「そうだよ」って言うと〔聞き取り不能〕とか。はっきり言ってこう、言った方がいいんだと思って、自分から。大人になったら「そうだよ。どうして？　何？　悪い？　どうしたの？　何かある？」みたいに言うと、「別に」みたく。だから「ああ、これはストレートに言った方がいい」「だからどうなの？　何かした？　迷惑かけた？　どうしたの？　何かある？」みたいに言うと、「いや、別に」みたく。こっちから言った方がいいんだと思って。それはもうだんだん大人になってきていろんなことあれしてから、自分から言えるようになったけど。それまで来るのには精神的にいろんなのあるよ。（壮年層・女性）

・（阿寒に）修学旅行行ったらさ、おおアイヌだアイヌだって言ったら、なんか自分に言われてるのかと思うから（中略）阿寒行くこと嫌いではないよ。一人でも（行くのは良いが）皆で行くのは（抵抗がある）。皆で行った時に、いやあ言われてねえか、アイヌ部落だって言われたら、俺の事言ってるのかなとか、なんかもう脳にそういうインプットしちゃうから、（壮年層・男性）

・鹿獲ったり、熊獲って、鮭獲って、いろんな山菜取っての生活して、その民族、素晴らしいと思うんだよね､本当はね。まあいろんな民族あるでしょ（中略）アフリカに行って民族じゃなくて、日本に民族というのがあるんだ。素晴らしいと思わない？（中略）差別だってくる可能性もあるけども、でも今はもう、すごいなんか、カッコイイと思わない？（壮年層・男性）

過去は「否定的」な意識であったが現在は「肯定的」な意識である者は、いずれも子ども期に学校で差別を受けたり、いじめられたりした経験があった。しかし、その後、青年期以降に意識の変化が見られる。変化のきっかけとしては、アイヌの住民が多い阿寒湖に行き、アイヌとして「恥ずかしがらないでいられた」経験や、アフリカの狩猟を行う民族を引き合いに出しながら、類似の文化を持つアイヌ民族を「素晴らしい」「カッコいい」と思えるようになったことがあげられた。明確なきっかけはないが、大人になってから、自らがアイヌであることを「ストレートに言った方がいい」と思い至り､相手からアイヌであることを言われるよりも､「こっちから言った方がいいんだ」という心境になっていた。

（過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」な意識である者）
・うちの息子もこのアイヌの儀式、今副会長やって頑張ってるけど、積極的に、娘も踊りやるし、孫までやるし、だから、ああ良かったんだなって思う、ちょっと、良かったのかなって心配になることもあるけど、うん、これで良かったんだなとか。子どもたちが自信持ってくれる、うちのお母さんもだからそやって思ってたのかなと思う。さかのぼったらばばまでも。（壮年層・女性）
・こんなこと言うの、なんだけど。○○（地域名）にいる人がたが、ある程度、そういう血筋の人が多いから、それが特別に思ったことはないし、普通に。（壮年層・女性）
・私の母親が一生懸命…今は亡くなっていないんだけど。先住民族の代表に近いような感じで、踊りでも刺繍とか、いろいろやっているのをそばでつねに見ていたものだから。（壮年層・女性）
・○○さんが役員をやっていたんですよね。その時に（中略）アイヌのことを一生懸命、子どもたちが就職しても困らないようにいろいろな面のハローワークとか行ってくれたりして、そういう部分がすごく「また違うのかな」って。これで普通のアイヌでなかったら「そういうふうに、一生懸命してくれる人がいたのかな」って。（壮年層・女性）

過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」な意識である者は、過去にいじめや差別をされた経験はあるものの、それがアイデンティティを傷つけ否定的にするものにはなっていなかった。アイヌの踊りや歌などの文化活動に取り組んだり､アイヌであることで就職の便宜を図ってくれる人の存在などを知ったりすることで、アイヌであることに対する否定的な意識を肯定的な意識に転換することができている。また、年齢を経るごとに否定的な経験をすることが減少し、肯定的な経験や意識の方がアイデンティティに影響を与えている。

（過去は「否定的」な意識であったが現在は「どちらでもない」意識である者＝壮年層・男性）
・アイヌの友だちはいたが、アイヌの濃い人とは関わらなかった。友だちにはなれたけども、一緒にはなりたくなかった。

・馬鹿にされないようにアピールをしていた。スポーツをすることで、友だちも多くできた。
・アイヌであることを理由にするいじめや差別に関しては、アイヌと馬鹿にされると返り討ちにしていたので、言われっぱなしになることはなかった。ただ、周りには言われっぱなしになっている人もいた。自分と関わる人は、いじめや差別をする人ではないが、一歩間違えていたらわからない。

過去は「否定的」な意識であったが現在は「どちらでもない」意識である者は１人のみであった。過去から自らがアイヌであることを認識しながらも、あえてアイヌの「濃い人」とは関わらないようにしていた。また、アイヌであることは馬鹿にされる原因になると考え、アイヌとしてのアイデンティティを消し、スポーツを通して「馬鹿にされないようにアピール」していた。一方で、馬鹿にする人に対しては「返り討ち」にしているため、自分と直接関わる人はいじめや差別をする人ではないが、「一歩間違えていたらわからない」と考えている。「返り討ち」にしなければ、自分は馬鹿にされる対象であると認識している。現在は否定的というほどの意識ではないが、肯定的な意識を持つには至っていない。

（過去も現在も「どちらでもない」意識である者）
・アイヌ民族のお土産物とかをやってたので、それが普通かなと思ってたんですよ。だからとくに全然気にした事ないです。（壮年層・男性）
・子ども同士は、あまりアイヌとかって意識しないんですけど、やっぱり親とかに言われて、「あの子アイヌの子でしょ」みたいな感じではありましたから。差別っていうほどではないんでしょうけど。そういう事はありましたね。（壮年層・女性・和人）
・25（歳）くらいを過ぎた時に。自分では意識がなかったんですけども、仕事に自信がついてきた時に、人から言われて初めて「ああ、そうなのかな」と思った（中略）自分では普通に就職して、だいぶ自信がついてきたので、（中略）人から言われて、初めていやな思いをした。自分では、そんなに思わなかったんですけど。（壮年層・男性）

過去も現在も「どちらでもない」意識である者に共通しているのは、アイヌであることを（自分も配偶者も）意識していないということである。アイヌ民族の土産物屋を営んでいたものの、小さい頃から現在までアイヌ文化の経験がない者、母親がアイヌ協会で踊りをしていたけれども、自身はアイヌについて関心がない、関与していないという者、アイヌの差別やいじめというのは見聞きしていても、自らの事柄として捉えておらず、成人期以降に「人から（アイヌであることを）言われて、はじめていやな思いをした」が、アイデンティティに影響を与える出来事にはなっていない者が見られた。また、アイヌ男性との結婚を周囲に反対された和人女性は、配偶者となる人がアイヌであることに対しては、肯定的でも否定的でもない意識であった。

（３）老年層

老年層 20 人のうち現在、アイヌであることに「肯定的」である意識を持っている者は 12 人、過去からそうであった者は１人のみであり、過去には「否定的」な意識であった者が４人、「どちら

でもない」意識であった者が７人であった。また、現在、「どちらでもない」意識である者は８人でそのうち過去には「否定的」な意識であった者が３人、「どちらでもない」意識であった者は５人であった。過去も現在も「否定的」な意識を持っている者はいなかった。

（過去も現在も「肯定的」な意識である者＝老年層・女性）
・アイヌの文化ってすごい文化だなって。すごいよ。それにみんな、北海道に住んでいる人たちさ、恩恵を受けている人、結構いるでしょう。そう思うとさ、アイヌ文化って素晴らしいな。踊りにしても歌にしてもアイヌの言葉にしても。地名だって結構、みんなアイヌの地名を。
・尊敬していたもの、みんな、アイヌのばあちゃんにしてもさ、みんな大好きだったから。アイヌのばあちゃんだって、何が悪いのかなという、子どもの時分からなかったもの。

過去も現在も「肯定的」な意識である者は１人であった。過去にいじめられた経験があり、アイヌであることが嫌だという気持ちがありながらも、いじめられても堂々としていた。その背景には、アイヌであることを肯定的に捉える和人との友人関係や、「アイヌのばあちゃん」を尊敬していた、大好きだったという意識があった。その経験に加え、成人期以降にアイヌ文化活動に携わるようになり、肯定的なアイデンティティが醸成されることとなった。

（過去は「否定的」な意識であったが現在は「肯定的」な意識である者）
・私は 42、43 才まで自分はアイヌだと言いたくなかったの。私ね、意外とアイヌに見られなかったの、この地域でもね。だけど最初にお嫁さんに行った所で、私はそう見えなくても、結婚式で父や母や叔父が来たでしょ。それからアイヌの家系だということで、すごい差別が始まったの。（老年層・女性）
・今お風呂あるからいいけどね、もとはお風呂ないところに行った場合だったら銭湯行くのも嫌だったし。若い時はパーマ屋いくのも嫌だった。首とかそういう…全部嫌だった。若い時はそういうの気にしますよね。今は年とって図々しくなったからそういうのは全然抵抗ない。ウタリだからってどうってことないって思いますけど、若い時はそうじゃなかったですね。どこに行くにも嫌でした。昔は差別あったからね。やっぱり嫌な思いばっかり若い時はしていましたよね。（老年層・女性）
・いじめはね、小学校１年生からね、もう６年生までの間ね、あの一部の、シサムの子に、いつもいじめられてたよ。それはアイヌ、アイヌって言ってね、４年生の時かな、消しゴムぶつけられたりね。（老年層・女性）
・自分がアイヌに生まれてね、小さい時は差別に悩んだけど、差別と劣等感だね。（老年層・男性）

過去は「否定的」な意識であったが現在は「肯定的」な意識である者は、長期間にわたって、いじめや差別、劣等感にさいなまれる経験をしていた。小学校の６年間、いつもいじめられたという者や、銭湯や美容室など日常的にでかける場所が「どこに行くにも嫌」なものになっていたという者、結婚後に婚家で差別を受けた者がいた。また、子ども期には「父親がアイヌの行事というのは大嫌いな人」であったために、自身も否定的な意識しか持てなかったという者もいた。しかし、こ

れらの人々は、次のような経験をすることによって肯定的な意識に変化している。

・（アイヌの）民芸品店に行った時に、自分がアイヌで良かったなと思うようになってきた。（中略）要するに、自分から、私アイヌだっていうことをお客さんに言えたの、観光客。その友だちも自分から、私アイヌ、メノコだよとかって言ってるのさ、そしたら写真のモデルとかなるんだよね、観光客と一緒に。アイヌ衣装着て。そういうのやっぱり、その頃は楽しかったね（中略）自分からアイヌって言えるっていうのは、すごくなんか開放的だね。（老年層・女性）
・アイヌ文化を勉強すると、こんな素晴らしい文化がある民族って、いいなと思ったの。（老年層・女性）
・みんな言わなくなったし。アイヌの人は素晴らしいって言うし、いい技術を持っているとかね。〔社会が変わってきましたもんね〕大事にしてくれるような気がする。（老年層・女性）
・ウタリ協会の人たちと踊ったりテレビ出たり活躍しているのを見て、いいなあって思いますけどね。（老年層・女性）
・アイヌのことだったらなんにでも参加したいって。（老年層・女性）

肯定的な意識を持つようになったきっかけとしては、アイヌであることをカミングアウトする機会があったことや、アイヌの人々がテレビ出演したり、社会が「アイヌの人はすばらしい」という評価をするように変化してきたことを感じたりすることがあげられた。具体的には、アイヌの民芸品店で、客に対して自身がアイヌであることを表明しアイヌ衣装を着て写真のモデルになった、アイヌの人は「いい技術を持っている」という社会の評価などが語られ、否定的な意識から肯定的な意識に変容している。さらに、アイヌ文化を勉強することで、学校でアイヌの話をしたりアドバイザーをしたり、踊りや歌を他者に教えたりする活動を通して、肯定的な意識がますます高まっていた。

（過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」な意識である者）
・何かしらないけど、そういう、アイヌ、アイヌって、べつに言われた事はないんだけど。なんか、そんな暇ないっていうのか、貧乏だったから。（老年層・女性）
・アイヌって言われて、本当の事だから。べつにアイヌって言われたって痛くも痒くもない。本当の事だから。そういうふうな主義だから、私（中略）だから子どもたちも、「お母さんもお父さんもアイヌだからね」って言って、こういう保存会に入ってね、踊ったり歌ったりしてるから。（老年層・女性）
・いろいろ行事に参加したりとか、学校の出前授業に行ったりとか、いろいろアイヌの事に関しての事が日常茶飯事にあるので。私はこのアイヌ文化っていうのを、もうずっと死ぬまで続けて一生懸命やっていきたいなと思っていますから。つねに感じますね。（老年層・女性）
・講師に行くんだわ。「アイヌの話を聞きたい」とか「昔の話を聞きたい」とかで小学校から頼まれて、最初行った時にはぶるぶる震えた。言えなかったの。だけど、慣れっていいもんですよ。ちゃんとできたんだから。（老年層・女性）
・要するに観光アイヌっていう感じで、阿寒に行ってからアイヌ民族からちょっと解放されたって

いうか。「仲間ってこういうもんなんだ」っていう意識が、阿寒へ行ってからすごく、私のアイデンティティが高まったという。だから阿寒へ行って良かったと思いましたね。ずーっと阿寒へ行かないでいたら、まだまだ暗い、楽しくない人生を過ごしてたかもしれないって。（老年層・女性）

過去は「どちらでもない」意識であったが現在は「肯定的」な意識である者は、以前はアイヌであることをあまり意識していなかったが、アイヌの文化やアイヌ協会の活動あるいは観光に携わるようになり、肯定的なエスニック・アイデンティティが醸成されていた。さらに団体の運営を担う立場となって、さまざまな活動を行うなかで「ずっとアイヌのことをやっていきたい」という意識になっている人々である。また、和人であるが、アイヌの養父母に育てられたために、学校などでアイヌとして差別を受けた女性は、自分は和人であるという意識がありながらも、現在はアイヌの養父母との生活の中で経験したアイヌ語やアイヌ文化を大切にしている。

（過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」意識である者）

・うちの父親はよくね、アイヌを馬鹿にする時にね、うちの中が汚くて、格好が汚くて、自分でもいいから髪の毛くらい切れるのに、親がね、そういうだらしないのがアイヌだってよく言ってたの。だからなるべく綺麗にしなきゃうちの中でも自分の身なりでも、綺麗にしよう、綺麗にっていうか、小奇麗にしてようっていうのはあった。見て汚いのは何か、アイヌっていうか、そういう風に小さい時は教えられてた。（老年層・女性）
・いじめられた経験がある。近所の子にすごくいじめられた。その他につらかったことはとくになかった。（老年層・女性）
・一番最初の結婚、それ（毛深いこと、配偶者からメノコと言われたこと）が原因で別れたもん。（老年層・女性）
・（アイヌ文化を）素晴らしいとは思ってないです（中略）何かこういう風に踊って皆にね、披露するとか、子どもにも自然で教えられることはうちの家族にはいいなとは思った。でも、アイヌ人を認めたわけでもないし、まだ、その時には自分はアイヌ人だっていうことを言えるようになったのはそのきっかけなんだけど、今もう決してアイヌ人を、何か素晴らしいとか、伝承していくのがすごいとか思えてない。（老年層・女性）

過去は「否定的」であったが現在は「どちらでもない」意識である者は、自身がアイヌであることを理由にいじめられたために否定的な意識であった者のほか、自分自身ではなく自分以外のアイヌに対して否定的な意識を持っている者が含まれる。「だらしないのがアイヌ」であり、自分自身はアイヌでありながらも裕福な家庭であったために、「だらしないアイヌ」と自分は別という認識があった。しかしながらアイヌであることを理由に離婚するという体験を経て、アイヌである自分自身に直面化せざるを得なくなる。現在は、アイヌ文化活動に参加しているものの、アイヌ文化を「素晴らしいとは思ってない」し、「アイヌ人を認めたわけでもない」という状況である。

（過去も現在も「どちらでもない」意識である者）

・◯◯（地域名）っていうとこにいた時は、もうアイヌの人ばっかりで（中略）近所、みんなアイヌの人ばかりだったんです。（老年層・男性・和人）
・付き合いって、友だちってみんなウタリばかりだから、別にそういうシャモだとかウタリだとかって自分たちわかんなかったしね（老年層・男性・和人）
・周りには（自分の家族以外にアイヌの人々が）まったくいなかった。（老年層・女性）
・それもわかんないなぁ。なんせ学校時代ね、「あんたアイヌの血統だ、アイヌだ」って言わたのが何回かあって、それで腹立ってその人に向かってかかったっていう。それは覚えあるんですよ。（老年層・女性）
・段々もう年を取ってるからね、（自分がアイヌであるかどうか）そんな事もう関係ないんですよ。（老年層・女性）

過去も現在も「どちらでもない」意識である者には、周囲に住んでいるのがアイヌの人ばかりであったために、アイヌであることを意識しなかった者、逆に、周囲にアイヌの人々がいなかったために、アイヌであることを意識しなかった者、学校時代に差別的な言動をされたものの、それがエスニック・アイデンティティにはあまり影響を与えていない者が含まれる。その意識は現在においてもほとんど変化しておらず、年齢が高齢期になっていることもあり、自身がアイヌかアイヌでないかということは「もう関係ない」こととして捉えられている。

第２節　アイヌ文化とエスニック・アイデンティティ

第１項　アイヌ文化の実践の概要

これまでに実施された調査においては、アイヌ文化の活動への参加やアイヌ関係団体に関与する機会の有無が、エスニック・アイデンティティに影響を与えることが示唆されてきた（小内・長田 2012、新藤 2013、新藤 2014）。白糠では「白糠アイヌ文化保存会」（以下、保存会）と「白糠アイヌ協会」（以下、協会）があり、アイヌの人々が集ってアイヌ文化を実践する活動基盤となっている。一方で、保存会や協会の活動には参画していないものの、日常生活のなかでアイヌ文化を実践している人々もいる。

本節では、アイヌ文化の経験とエスニック・アイデンティティの関連について検討していく。まず、実践しているアイヌ文化の有無について、現在、実践している文化がある者は、白糠では、70.8％であり、伊達（36.2％）、新ひだか（47.4％）、札幌・むかわ（66.1％）のいずれをも上回っている（表６－５）。年齢層別にみると、白糠では、文化を実践している者の割合は、青年層（81.3％）、老年層（70.0％）、壮年層（58.3％）の順で多かった（表６－６）。伊達、新ひだか、札幌・むかわと比較すると、白糠は、青年層で文化を実践している者の割合が最も高い。なお３つの年齢層の中で青年層が最も多いのは白糠と新ひだかであり、新ひだかは、青年層（66.7％）、老年層（59.1％）、壮年層（30.8％）の順である。伊達、札幌・むかわは老年層、壮年層、青年層の順に多くなっている。

表６－５　アイヌ文化の実践（地域別）　　単位：人、％

	実践している文化			
	あり		なし	
白糠	34	70.8%	14	29.2%
伊達	17	36.2%	30	63.8%
新ひだか	27	47.4%	30	52.6%
札幌・むかわ	74	66.1%	38	33.9%

表６－６　アイヌ文化の実践（年齢層別）　　単位:人、％

	実践している文化			
	あり		なし	
青年層	13	81.3%	3	18.8%
壮年層	7	58.3%	5	41.7%
老年層	14	70.0%	6	30.0%
合計	34	70.8%	14	29.2%

では、現在のアイヌ文化の実践にはどのようなものがあるのだろうか。大きくは、白糠アイヌ文化保存会での歌や踊りの活動や白糠アイヌ協会が主催するアイヌ三大祭り（ふるさと祭り、フンペ祭り、ししゃも祭り）でのアイヌ民族伝統儀式などと、日常生活のなかで実践されているもの、生業として携わるものに分けられる。現在、アイヌ文化の実践があるとした人々のうち、大半を占めるのが保存会と協会での活動である。保存会には、青年層の 56.3％、壮年層の 33.3％、老年層の 35.0％が加入している（表６－７）。老年層においては、現在は加入していないものの過去に加入していた者が 20.0％を占める。また、協会には、青年層の 62.5％、壮年層の 50.0％、老年層の 45.0％が加入している（表６－８）。協会においても現在は加入していないものの過去に加入していた老年層が 40.0％を占めている。

表６－７　白糠アイヌ文化保存会への加入　　単位：人、％

世代	加入している		加入していない				不明	
					過去に加入していた			
青年層	9	56.3%	5	31.3%	1	6.3%	1	6.3%
壮年層	4	33.3%	7	58.3%	1	8.3%	0	0.0%
老年層	7	35.0%	7	35.0%	4	20.0%	2	10.0%
合計	20	41.7%	19	39.6%	6	12.5%	3	6.3%

表６－８　白糠アイヌ協会への加入　　単位：人、％

世代	加入している		加入していない				不明	
					過去に加入していた			
青年層	10	62.5%	5	31.3%	1	6.3%	0	0.0%
壮年層	6	50.0%	4	33.3%	2	16.7%	0	0.0%
老年層	9	45.0%	2	10.0%	8	40.0%	1	4.5%
合計	25	52.1%	11	22.9%	11	22.9%	1	2.1%

第２項　白糠アイヌ文化保存会と白糠アイヌ協会における実践

実践しているアイヌ文化の内容は、すべての年齢層で見られるのが、歌、踊りであり、白糠アイ

ヌ文化保存会での活動、アイヌ三大祭りへの参加が主となっている。そういった活動とエスニック・アイデンティティはどのように関連しているのであろうか。

（1）青年層

・俺、いつから踊ってるかわかんないんだよね（中略）幼稚園上がる前に、立ってる時にはもう弓の舞ってね、クリムセ踊ってたっていうから。俺がいつからそんな、踊りを覚えていつから踊ってるのかとかも覚えてないし。（青年層・男性）
・今踊りをやってるので、その時には（自身がアイヌであることを）意識するというか。普段は別にそういう関わることがないので。（保存会の活動は）３歳の時から。（中略）おばあちゃんがアイヌの踊りをやってたりとかしてて、そこに孫たちを連れていったりして、興味があるかどうかっていうので連れてこられて、すごく楽しいなと思っていたのが記憶にあるんですけど。それでここから踊りを踊ったりするような形で今に至るというか。（青年層・女性）
・私ってそこまでアイヌ、アイヌっていうふうに勉強しているわけでもなく、中途半端なアイヌなんですよ。純粋に好きだから踊ってる。純粋に歌が好きだから踊ってる。（青年層・女性）
・私は踊りが好きで入っただけだからね。アイヌ語を習おうとか、刺しゅうを習おうとか、そういう気は今はまだない。〔やっぱり踊りは楽しいですか？〕うん。別に好きでやってるから、今まで続いてきたし。そんなに深く考えたことはないね、踊らなくちゃとか。〔ただ好きでずっとやってきてって、そこに結構アイヌを守ろうっていう意識はするほど…。〕そんなに強くないね。（青年層・女性）
・白糠の三大祭りに出れるだけで俺はそれで良いと思うし。秋サケ漁のマレクね、マレクもやれる時にやれれば良いし。生活第一だからさ。（青年層・男性）
・俺らが楽しくてやってるわけじゃなくて、そうやって神様に感謝するお祭りだから、それだったらそういうのをね、共感出来るアイヌの人たちに来てもらって、一緒に先祖供養だとか神様に感謝したりだとか、そういうのがあって良いなと思う（青年層・男性）

青年層においては、幼少期から保存会で踊りの練習に参加していた者が多い。自身のエスニック・アイデンティティを意識する以前からこうした文化活動に携わり、現在に至っている。そのなかで語られるのは、「踊りが楽しい」ということであり、自分が幼少期から踊りに親しんだように、自分の子どもも一緒に参加している者も見られた。踊りを楽しみたいという気持ちが強く、アイヌ文化の継承といった意識は薄い。三大祭りについては、「楽しい」ことが参加の第一の動機である者もいる一方で、「神様に感謝するお祭り」であり、「楽しくてやっているわけじゃな」いと明確に位置づけ、参加の動機がエスニック・アイデンティティと結びついている者も見られた。

（2）壮年層

・（アイヌ三大祭りは）やっぱりアイヌ民族がみんな一つになってまとまってやれる大事な行事なので、すごく心のよりどころにみんななっていて、いいと思いますね。あと、子どもたちに対しても伝統を伝承していく上で必要な、貴重なお祭りだと思います。そういう部分で教えていける部分というのはたくさんあるかなと。子どもたちもやっぱり何のためにこのお祭りをやっている

のかというのを。（壮年層・女性）
・子どもの頃からずっと（アイヌのお祭りに参加してきた）。（壮年層・女性）
・（踊りは）子どもの時から身についてる。何十年も大人になってやってなくて、ちょっとやってごらんって言ったら、体が反応して動けるっていうか、踊れるっていうか。（壮年層・女性）
・（協会に加入することで）お金の面でというか、お金の部分で援助してもらったりするのはすごく助かると思うんですよね。たとえば、高校に入るのに就学援助があったりとか、そういう部分ではすごくいいんですけど、悪い方向と言ったらあれですが、ずるい方向に行ってしまうのはどうかなと思うから、もう少しお金のためでなくてもアイヌ文化のことを心からやりたいと思えるようなアイヌでありたいなと思いますね。（壮年層・女性）

まず、壮年層においては、アイヌ文化を実践している者が６人であった。しかし、それらの人々にとって、アイヌのお祭りがアイヌの人々の「心のよりどころ」であり、エスニック･アイデンティティを確認し培う場であり、子どもたちに伝統を伝承していく上でも重要であると位置づけられている。また、踊りは「体が反応」するほど馴染み深いものであり、アイヌであることを自然に表出できる文化であるが、自然であるがゆえに、エスニック・アイデンティティをとくに意識するという語りは見られなかった。一方で、協会に加入することで、就学援助が得られることは「すごく助かる」とした上で、「お金のためでなくてもアイヌ文化のことを心からやりたいと思えるようなアイヌでありたい」という思いが語られた。

（３）老年層
・やはり一番先に興味を持ったのが、アイヌの歌かな。「あっ、こんな優しい歌い方をするんだ」とか、「こんないい歌があるんだ」と思ったのが最初。それがきっかけかもしれない。アイヌの歌がね、たくさんあるんだもの、いい歌が。それのね、意味とかを調べているうちに、「ああ、すごい、アイヌの人って優しいな」と思い始めた。（老年層・女性）
・やっぱり私はね、アイヌ語がとっても大事なんですよ。言葉っていうのはね、やっぱり文化そのものなんですよね。アイヌ語の素晴らしさっていうのが伝われば良いなと思うんですよ。（老年層・女性）
・（歌や踊りを披露するために）どっかへ行くとか何かをするっていう時はお金がかかりますから。アイヌ民族っていうのは、今でも本当に、大半が生活保護を受けて生活してる人がほとんどですので、やはりね、（踊りや歌を披露して）お金が出るっていう事はね、やっぱりみんなの生活にとっては一番喜ばしい事なんですよね。（老年層・女性）

老年層においては、歌、アイヌ語、踊りなどの実践が行われ、それらの実践を通して学ぶ、歌の意味やアイヌ語のなりたちが、肯定的なエスニック・アイデンティティの拠り所になっていた。一方で、保存会で練習した踊りや歌を披露することで、金銭的な対価を得ることについては、アイヌの人々の生活状況に鑑みると、「みんなの生活にとっては一番喜ばしい事」であるという現実的な考え方が語られた。

このことは、協会の加入動機においても表れている。「（協会加入の）きっかけはね、やっぱり子

どもが高校へ行くようになって、進学資金の制度があるという事」（老年層・女性）というように、協会に加入することで利用しやすくなる教育費の給付貸付や住宅資金貸与のメリットが、協会加入の動機になっている者もいる。こうした実際に生活を営むうえでメリットを得られることが加入の第一の動機になっており、同様の語りは老年層だけでなく、すべての年齢層で見られた。一方で、「ウタリ協会入ってればね、なんか困った時、うち建てた時、お金も借りれるとかって話聞いたのさ。お金借りなくても良いから、踊りだけでも覚えたいなと思って入ったわけだ。自分は好きだったから、歌と。」（老年層・女性）という語りに見られるように、金銭面でのメリットが協会加入の第一の動機であったとしても、加入に伴いアイヌの踊りや歌を学び実践の機会が生じるという面もある。

第３項　日常生活で行われているアイヌ文化

これまで見たように、現在、実践されているアイヌ文化の多くは、保存会や協会が基盤となった活動である。一方で、それらの活動とは別に、独自に生活のなかで実践されているアイヌ文化がある。これらの実践は会に加入していない者においても行われていた。

（１）青年層

・カムイノミはね、アイヌ語はしゃべれないんだけども、カムイノミは給料日の時とか、自分で何か特別なこと思うようなところ、カムイのお陰だなって思ったりとか、不安なことだとか気になることだとか、そういうのがあったらカムイノミしたり、そういうことはやってる。（青年層・男性）
・一番身近なのが歌と踊りと木彫ですかね。祖父が木彫やっていて、結構、熊の木彫とかそういう民芸品屋さんやってて…。（青年層・女性）
・家でも（息子に）アイヌ語で教えたりとか、自分の知ってることはどんどん伝えていこうと思ってるし。（青年層・男性）
・刺繍を頑張って。着物をいつか作んないとなと思っています。（青年層・女性・和人）
・生活をやってる中でそういうこと（アイヌの料理や工作）をやってるのが普通だったおばあちゃんだから、それを私が見て「おばあちゃん何やってるの？」って私が興味を持ったら「こういうので昔のアイヌの人たちはこういうのを作ってたんだよっていうのをおばあちゃんは今やってるんだよ」って言ってて、「へー、私今工作何作っていいかわからないから、おばあちゃん教えて」って言って教えてもらったりとか（中略）ただ普通に生活している中で私が興味を持ってやってたことに教えてくれたりとかっていうふうな。一般でいったら、お母さんが料理を当たり前に作ってるのを子どもが興味持って私もやりたいみたいな感じでやってるのと同じ感じかな。そんな感じですね。（青年層・女性）

日常生活のなかで実践されているアイヌ文化としては、カムイノミ、歌、踊り、アイヌ語、刺繍、アイヌ料理などが見られた。これらはすべて保存会や協会でも行われてきたが、個人の生活のなかで継承され身についた習慣や技術として実践されている。「今の生活の中でできる昔やってたこと」（青年層・男性）として位置づけ、自然と実践されているもの（カムイノミ、アイヌ料理など）と、意識的に実践されているもの（アイヌ語、刺繍など）があった。

（2）壮年層

・カムイノミとかはやっぱり。うちの夫も一生懸命やりますね。先祖供養もしますね。必要だと思います。夢見を大事にしたり、夢も見るし、アイヌ語もやっていますね。歌と踊りもやっています。刺繍もします。料理もしますね。（壮年層・女性）

・普段は（アイヌ文化の実践は）ないけど、うちの母親や姉が亡くなった時に、アイヌ衣装を着せて送ってやりましたね。アイヌ衣装で湯灌して。母親も姉ふたりもそうですね。（壮年層・女性）

・今、刺繍が大好きなんだけど、うちの母親がやってきたキナアミを、自分がいずれはやりたいんだけど、いずれね。それが関わってみたいなと思う。（壮年層・女性）

壮年層においては、日常的なアイヌ文化の実践を行っている者は少ないものの、実践者は、現在、実践可能なアイヌ文化をほぼすべて実施していた。一方で、過去に行われたこととして、普段はアイヌ文化をまったく実践していないものの、自分の母親や姉が亡くなった際に、アイヌ衣装を着用した葬送を行った者も見られた。アイヌ文化を日常的に実践していなくても、そのような時にアイヌ文化が実践される場合があることを示している。

（3）老年層

・（アイヌの歌を歌ったら）やっぱり世間は大事にしてくれるよ。私は文化人だって。（老年層・女性）

・テレビでね、どこどこのアイヌの踊りとか入ったらね、ちょこっとだけど、楽しみで聞いてる（中略）ウキウキしてくるね。踊りたくなるね。（老年層・女性）

・（先祖の織物や木彫りが残され）もう私で８代にもなっている。（中略）だから、もう今からは自分で作ったもの、練習したものは、皆、私が生きているうちに始末しようと、しているの。もう私が死んだら、アイヌも消えちゃうでしょう。８代だもの。（老年層・女性）

・お祖父ちゃん、うちの人の父親が、生まれた時に「おねえさん、お願いがあるんです。アイヌ語の名前を付けさせて下さい。」って言って。病院にいる間に姪っ子に（アイヌ語の名前を付けた）。（老年層・女性）

老年層においては、現在の日常的なアイヌ文化よりは、過去から現在につながるアイヌ文化が語られた。現在は高齢のため、ほとんど歌は歌っていないものの、かつての活動から世間に「文化人」と言われていることが、エスニック・アイデンティティになっていた。そういった功績はないものの、かつては踊りをしていた経験から、テレビでアイヌの踊りが放映されると、「ウキウキ」するといった、日常生活の潤いになっているという者もいた。また、過去に姪っ子がアイヌ語の名前をつけられたことを肯定的に捉える語りもあった。一方で、先祖から伝承されている織物や木彫りについて、「私が死んだら、アイヌも消えちゃう」と考え、「私が生きているうちに始末しよう」としているという悲観的な語りも見られた。

第４項　生業として携わるアイヌ文化

これまで見てきたような保存会や協会、日常生活の中で実践されているアイヌ文化のほかに、生業としてアイヌ文化に携わった経験のある者も見られた。アイヌ民芸品販売やアイヌ舞踊披露など

観光産業での就労に携わった者が青年層と壮年層で２人ずつ、老年層で３人いた。また、実際には直接的な生業とはなっている者はいなかったが、各年齢層でアイヌの人々を対象とした機動職業訓練でアイヌ刺繍や織物を学んだ者もいた。

・（中学を卒業して就いた職業は）阿寒湖畔の民芸品店ですね（中略）そこは民芸品店だけじゃなくて、喫茶店も営んでるし、屈斜路湖にドライブインも持ってるし、○○（団体名）っていうアイヌの踊りの舞踊団がいるんですよ…それに憧れて、そこに入ったっていうだけで、民芸品を売りたくて入ったわけじゃない。（青年層・女性）
・中学校を卒業してから阿寒の方で踊りの勉強を。アイヌ語とか、アイヌの風習とかいろいろな面を勉強するために阿寒湖に行って、20歳までアイヌの学習をするために行ったところで働きながら（中略）その舞台でずっとアイヌの踊りを踊ってお客さん、観光客に見せていたので。（壮年層・女性）
・阿寒湖にいてね、店員やってる頃から、アイヌ文化に触れてたから（中略）歌とか踊りとかムックリとか刺繍とか(中略)そこのお店に働いてたらね､それやれって言われるのよ。（老年層･女性）
･私の母と父が阿寒湖畔のアイヌ部落でアイヌ踊りとか舞踊の方のアイヌ。母がやってましたので。父も普通の人なんだけど、エカシの格好をして、つるぎの舞っていって刀で戦う、あれを衣装着て着物着てやってて。木彫りの民芸品のお土産屋さんも自営業でやってたんで。父はアイヌの着物を着て、昔の手作りの木彫り。（壮年層・女性）

このように、阿寒湖畔の民芸品店では販売員として働きながら、踊りや歌、アイヌ語、ムックリ、刺繍などを勉強し､主に踊りを観光客に披露するという経験をしていた。こうしたアイヌ文化を「仕事」として学び披露するという経験が、アイヌとしてのアイデンティティを肯定的なものにしていた。「阿寒に行ってからアイヌ民族からちょっと解放されたっていうか。『仲間ってこういうもんなんだ』っていう意識が､阿寒へ行ってからすごく､私のアイデンティティが高まったという」（前出:老年層・女性）という語りも見られた。また、家族がアイヌ民芸品店を自営していた者もおり、観光産業に携わることでアイヌ文化に日常的に触れる機会になっていた。

･アイヌの機動訓練っていうのに半年かな、１年かな、結婚、妊娠、出産でしばらく就職してなかった間に機動訓練っていうのはちょっと行ったことがありますね（中略）それこそ刺繍したりするような。作ったものをどうしてたのかわからないけど、そういうのをひたすら。刺繍の勉強というかそういうふうに。（青年層・女性）
・（機動訓練で）刺繍（を習った)。（中略）生活してたからそこに、ましてお金がもらえたし。すごい大きいお金もらえた。（老年層・女性）
・その頃ウタリ協会で、機動訓練っていうのをやったんですよ。職業機動訓練っていう。それで、そこに入ると10万ぐらいの手当てをもらいながらいろいろな文化を、刺繍であったり着物作りであったり。で、いろんな事をやったんですよね。それに入って刺繍も覚えたし、そういう技術の習得のために（協会に）入ったっていうのがきっかけですね。べつにアイデンティティとかはなかったです、きっかけには。〔じゃあ、お子様の高校進学と、ご自身の。〕そうそう。家庭環境

ですね。家庭の中の諸事情ですよね。（老年層・女性）

機動職業訓練は、「機動的な職業訓練を実施することにより再就職を促進」（北海道経済部労働局2013）するものであるが、アイヌ刺繍などの公共職業訓練を受講することが再就職に結びついているわけではなく、現実的には受講奨励金・受講支度金などが生活を扶助するものとなっていると見られる。「べつにアイデンティティとかはなかったです」という語りに見られるように、金銭面のメリットを得られることが機動訓練の動機であり生業に結びついていないとしても、アイヌ刺繍・織物の技術を習得するなどアイヌ文化に携わることやアイヌ協会への加入の機会になっている。

第３節　アイヌとしてのアイデンティティと今後

第１項　今後の意識の概要

それでは、アイヌの人々は今後、どのような意識で生活していくのだろうか。これまでの結果をふまえ、過去・現在・今後への意識を概観した上で、検討を行っていく。本調査では、アイヌとしての今後の生活の意識について、「アイヌとして積極的に生きていきたい」「極力アイヌであることを知られずに生活したい」「とくに民族は意識せず生活したい」「その他」の４つの選択肢から最も近いものについて回答を得た（表６－９）。表６－９では、「アイヌとして積極的に生きていきたい」を「積極的」、「極力アイヌであることを知られずに生活したい」を「消極的」、「とくに民族は意識せず生活したい」を「どちらでもない」として表記した。

全体の結果としては、「とくに民族は意識せず生活したい」が52.1％で最も多く、次いで、「アイヌとして積極的に生きていきたい」が41.7％であった。「極力アイヌであることを知られずに生活したい」はいなかった。これまでの研究結果と比較すると、「積極的」である者は札幌・むかわ（59.8％）に次いで多く、「どちらでもない」者は新ひだか（50.9％）とほぼ同じ水準であり、伊達（83.0％）に次いで多かった。「消極的」である者はいなかった。年齢層別に見たものが表６－10である。今後の意識には年齢層によってほとんど差がなかった。この結果を現在の意識との対比でまとめたものが表６－11である。

表６－９　アイヌであることに対する今後の意識　　単位：人、％

	積極的		消極的		どちらでもない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
白糠	20	41.7%	0	0.00%	25	52.1%	3	6.3%	48	100.0%
伊達	7	14.9%	0	0.00%	39	83.0%	1	2.1%	47	100.0%
新ひだか	21	36.8%	1	1.80%	29	50.9%	6	10.5%	57	100.0%
札幌・むかわ	67	59.8%	4	3.60%	41	36.6%	－	－	112	100.0%

注）調査における「肯定的になる」は「積極的」、「否定的になる」は「消極的」と表記

表６－10　アイヌであることに対する今後の意識　　単位：人、％

	積極的		消極的		意識しない		不明		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
青年層	7	43.8%	0	0.0%	9	56.3%	0	0.0%	16	100.0%
壮年層	5	41.7%	0	0.0%	6	50.0%	1	8.3%	12	100.0%
老年層	8	40.0%	0	0.0%	10	50.0%	2	10.0%	20	100.0%
合計	20	41.7%	0	0.0%	25	52.1%	3	6.3%	48	100.0%

表６－11　アイヌであることに対する今後の意識　　単位：人

	現在		今後		現在		今後		現在		今後	
青年層（16 人）	肯定的	9	積極的	7	否定的	1	積極的	0	どちらでもない	6	積極的	0
			消極的	0			消極的	1			消極的	0
			どちらでもない	2			どちらでもない	0			どちらでもない	6
			その他	0			その他	0			その他	0
壮年層（12 人）		6	積極的	5		0	積極的	0		6	積極的	0
			消極的	0			消極的	0			消極的	0
			どちらでもない	1			どちらでもない	0			どちらでもない	5
			その他	0			その他	0			その他	1
老年層（20 人）		12	積極的	8		0	積極的	0		8	積極的	0
			消極的	0			消極的	0			消極的	0
			どちらでもない	3			どちらでもない	0			どちらでもない	7
			その他	1			その他	0			その他	1
合計（48 人）		27	積極的	20		1	積極的	0		20	積極的	0
			消極的	0			消極的	1			消極的	0
			どちらでもない	6			どちらでもない	0			どちらでもない	18
			その他	1			その他	0			その他	2

これまでの結果をふまえ、過去、現在、今後（将来）の時間軸に沿って分類したものが表６－12 である。現在と今後との比較では、「肯定的／積極的」な意識の者は現在（56.3％）よりも今後（41.7％）が少なくなっている。一方で「どちらでもない／意識しない」者は現在（41.7％）よりも今後（52.1％）が多くなっている。しかし、過去、現在、今後の時間軸では、「否定的／消極的」な意識の者は減少し、今後もネガティブな意識である者はいなかった。以降では、今後の意識として「肯定的／積極的」「どちらでもない／意識しない」それぞれの意識を有している人々の語りを見ていく。

表６－12　アイヌであることに対する過去・現在・今後の意識　　単位：人、％

	肯定的／積極的		否定的／消極的		どちらでもない／意識しない		その他		合計	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
過去	5	10.4%	12	25.0%	31	64.6%	-	-	48	100.0%
現在	27	56.3%	1	2.1%	20	41.7%	-	-	48	100.0%
今後	20	41.7%	0	0.00%	25	52.1%	3	6.3%	48	100.0%
合計	52	36.1%	13	9.0%	76	52.8%	3	2.1%	144	100.0%

現在、アイヌであることに肯定的な意識を持っている 27 人のうち、今後も積極的に生きていきたいという者は 20 人である（74.1％）。札幌・むかわでは、どの世代においても、「肯定的」である人々は、例外なく将来にわたって「肯定的」であり続ける（あり続けたい）という意識を持っており、伊達では、現在、肯定的な意識を持っている者のうち、今後、積極的に生きていきたいという者は 85.7％、新ひだかでは 67.8％であったことから、白糠は、４地域の調査の中では低いほうになる。しかし、全般的な今後の意識としては、「肯定的／積極的」な意識の者と「どちらでもない／意識しない」者の割合は同程度と見てよいだろう。次項以降では、今後の意識について、「肯定的／積極的」な意識の者と「どちらでもない／意識しない」者の２つに分け、それぞれ年齢層別に検討を行う。

第２項　積極的なエスニック・アイデンティティ

（１）青年層

・もともとは踊りをやってて、踊りだけやってればいいと思ってた。踊りを覚えて次に伝えてってやっていければいいなと思ってたんだけど。だからその頃は別にアイヌ語知らなくても日本語しゃべれるんだしいいやっていう、使わないしっていう感覚だったんだけども、やっぱりアイヌ文化に携わっていくと何か１つだけってことにならなくなっちゃうんだ。だから、踊りも結局なんで踊ってるかったらカムイノミだとか何だとかの後にやるから、神様に見せるもんだと思ってやってるわけ、踊りはね。人に見せるもんでなくて神様に見せるもんだって。（青年層・男性）

・文化は伝承していきたいんですけど（中略）もっと小さい子に教えていきたいですね、私は。（青年層・女性）

・文化絶やさないように、みんな頑張ればいいんじゃないかなと思うけど、自分も含めてね（中略）ちょっとしかいない民族なんだから、やっぱ途絶えさせちゃいけないんじゃないのかなとは、私は思ってるけど（中略）なくしちゃいけないもんじゃないんじゃない、だめなんじゃない、なくしちゃ、やっぱり何でも。（青年層・女性）

・現代の中でできる限りのことは覚えたいしやっていきたいなと。（青年層・男性）

青年層において、アイヌとして今後、積極的に生きていきたいと考えている人々は、例外なく、アイヌ文化とのかかわりについて言及していた。きっかけは踊りを始めたことであり「踊りだけやってればいいと思ってた」が、「やっぱりアイヌ文化に携わっていくと何か１つだけってことにならなくなっちゃう」という意識の変化があった。踊りをきっかけに、カムイノミや踊りを神様に見せるというアイヌ文化の意味を考えていた。また、文化を絶やさず伝承することへの意識が強く見られ、「できる限りのことは覚えたいしやっていきたい」という意思の表明があった。また、和人配偶者（女性）は、「旦那が踊りを教えるのを頑張りたいとかって言ったら、それは協力しようと。だから、積極的にというか、協力的にっていう方が」と述べ、私生活の中で、アイヌの文化を子どもに「染みつけたい」としている。そういった文化の伝承は、外で行われるものではなく「家で。楽しくなったら家族で踊ったり。そういうので染みつく」ことが理想だと考えている。

（２）壮年層

・やっぱりアイヌ民族の精神文化とか、昔の人が受け継いできた優しい心というか、自然に対しての優しい心とか、そういうのを子どもたちになるべく伝えていけたらなと思います。（壮年層・女性）

・孫がモシリを見ててね、やっているところを見たり。血筋っていうのかね、すごく嬉しく思って。〔長男さんや奥様に積極的に活動を頑張ってほしいと思われて…〕思っています。自分ができない分、好きだから好きなことをね。自分の血筋の文化だから、やってもらいたいという気持ちがじゅうぶんある。（壮年層・女性）

・今はちょっと小さい子（孫）がいてなかなかできないんですが、刺繍が大好きなのですよね。だから、できれば今、アイヌのことを始めた夫のために衣装を作ってあげたりとか、子どもの衣装を作ったりとかしたいですね、時間を割いて。（壮年層・女性）

・アイヌだからっていう、ばかにされるようなふうに思われないように、頑張って生きていきたい。（壮年層・女性）

青年層が子ども世代にアイヌの文化を伝えていきたいと考えていることに対し、壮年層では、伝承の対象が子ども世代のみならず孫世代にわたっている。自分が踊りや刺繍などを実際に行っていきたいという意向があるほか、「自分ができない分」を子どもや配偶者に担ってほしいという意向も語られていた。こうしたアイヌ民族の「精神文化」や「優しい心」など、誇らしいエスニック・アイデンティティにもとづいて、アイヌとしての積極性を見出している者がいる一方で、アイヌであることを「ばかにされる」ことを避けるために、「頑張って生きていきたい」と考えている者も見られた。

（３）老年層

・（アイヌだと表明して生きることは）だって自分が楽だもの。だってさ、自分は隠して生きてきたってどうしようもない。外見からそうだから。だから積極的に生きている方が、相手も受け入れやすいと思う。そういう意味。だから隠したことないです。（老年層・女性）
・親に感謝してるもん、アイヌに生んでくれて良かったって。（老年層・女性）
・それ（アイヌの文化活動に携わること）が今、私の生きがいになってます。（老年層・女性）
・祖先の苦しみとか悲しみとか、そういうものをうやむやにしたくないなっていう。本当に辛いいろんな過去があって、それを何も無かったように消されるっていうのは、とっても苦しいというか、祖先に申し訳ないような気がして、私は彼らのためにそういう文化伝承っていうか、アイヌ民族は素晴らしい民族ですよっていう事を死ぬまで言っていきたいと思います。（老年層・女性）

老年層では、過去のアイヌであることを否定的なまなざしで見られるという体験を経て、現在はアイヌの人々に対する社会的な見方が肯定的なものに変化するという経験している。そのため、アイヌであることを隠したり、否定されたりする時代を経て、現在、アイヌとしての活動を行っている人々は、「隠して生きてきたってどうしようもない」、「それ（アイヌの文化活動に携わること）が今、私の生きがい」というように、辛い思いをしてきた祖先のために「文化伝承」をしていきたいという意思を持っている。

第３項　アイヌであることを「意識しない」というアイデンティティ

（１）青年層

・行事とかは自分から興味を持っているので、参加していこうとは思いますけども。昔のアイヌみたいに、自分の家でカムイノミしたりとか、そういう本格的なことは多分しないと思うので、その辺はあまり意識しないで。（青年層・男性）
・今はとくに民族は意識せず生活したいっていうのが正直。自分に余裕ができて、自分にそういうふうな勉強とか時間がきたら、アイヌのことを積極的に覚えていくようにはなりたいなと思います〔今のお子さんが小さかったりとか。〕っていうので集中できる余裕が今正直言ってないから。子どもと一緒にとりあえず今は楽しむことをベストとして。（青年層・女性）

・アイヌだけど、別にアイヌ語話さなくても良いなと思ってるからさ。だって今、共通語は日本語でしょ？　わざわざアイヌ語覚えてさ、誰に披露するの？　っていう感じだから。ユーカラとか学んで披露するならわかるけど、別に、アイヌ語覚えて何やるのっていう感じだもん。今日本語で全部通せるから。（青年層・男性）
・（アイヌ）協会に入ればそういうの（教育費の給付）を自分の子どもも受けられるって聞いてたけど、どうしてもそういう協会に入るのがね、いまだに俺はイヤなの。イヤだっていうのは、それほど小学生の時にいじめが…尾を引くっていうかね。（青年層・男性）
・幼稚園とか保育園の時に、自分の生まれてきた子どもに、うちの母親。祖母ちゃんだよね。が、踊りとか教えるわけさ。孫めんこいって言って。「やめてくれ」って言いたかったんだけど。（青年層・男性）

アイヌであることを意識しない人々は、おおまかに２つに分けられる。ひとつは、協会が主催する行事や保存会の活動には参加するものの、中心的役割を担うわけではないので、とりわけアイヌであることを意識しない者、もうひとつは、アイヌであることに否定的ではないものの、さまざまな活動への意義をあまり見出せず、アイヌとしての関わりを最小限にしておきたいと考える者である。アイヌ語を話さなくてもよいと考える背景には、「ユーカラとか学んで披露するならわかる」というように、アイヌ文化は人に見せるためのものという意識が垣間見られる。また、子ども時代にいじめられた経験が尾を引いているために、アイヌ協会に加入することにためらい、自分の子どもに母親がアイヌの踊りを教えることに抵抗感を持っている者もいる。

（２）壮年層
・アイヌ民族とかシャモとか和人とか、土人とか何とかって無いと思うよ。人間的に暮らしていきたい。（壮年層・女性）
・普通に、自然に生活していきたいから。アイヌ民族とかじゃなくて俺は地球人だっていうことで。（壮年層・男性）
・全般的に、アイヌ民族をきっかけにしてお金をもらおうとしていることが見え見え。北海道にも本当のアイヌという人が少なくなっているので、アイヌ政策というのもどうなのか。何をうったえていて何をしたいのか詳しいことはわからないから、どれがいいとかそういう人たちの中には参加したくない。自分は自分なりに精一杯生きている。（壮年層・男性）

壮年層でアイヌであることを意識せず生活していきたいと考える人々は、アイヌと和人は人間としての違いがないため、ことさらアイヌであることを積極的に出したくないと考えている。アイヌであることをアピールすることは、「お金をもらおうとしている」ことであると批判的に捉えられている。「自分なりに精一杯生きている」自分は、そういったアイヌの人々とは異なるため、「そういう人たちの中には参加したくない」という思いを抱いている。自身がアイヌであることと、自身の今後の生き方は関係ないことだと考えられている。

（3）老年層

・いまはね、もう年だから、なるべく孫のところにも迷惑かけないように、自分なりに生活していきたいです。気の毒だもの、嫌な思いするのはね。（老年層・女性）
・別に（アイヌで）あってもなくても、自分であれすれば気持ちがあんまりなくなってきているみたい。だからもう、どうでもよくなっているんだよね（中略）だから他人事みたいに考えちゃって。（老年層・女性）
・段々もう年を取ってるからね、そんな事もう関係ないんですよ。（老年層・女性）

老年層でアイヌであることを意識せずに生活していきたいと考える人々には、自分自身はアイヌとして文化活動などに携わってきたが、自分がそういった活動を続けることは孫に迷惑をかけると思っている者、高齢期になり、自身がアイヌであるかどうかということが「どうでもよくなっている」「もう関係ない」という者が見られた。前者は、アイヌ文化を子や孫に引き継ぐことはできないとあきらめ、さまざまな活動から退いていた。後者は自身がアイヌであることが「他人事みたい」になり、否定的な意識も肯定的な意識も有していなかった。

おわりに

本章では、エスニック・アイデンティティとアイヌ文化の経験について、その意識と経験を青年層、壮年層、老年層の年齢軸と、過去、現在、未来の時間軸に沿って検討してきた。本調査の特徴としては、まず、白糠のアイヌの人々のアイヌであることに対する過去の意識として「否定的である」という者の割合が、伊達、新ひだか、札幌・むかわのいずれよりも高い（25.0％）一方で、現在の意識として「肯定的である」者の割合も、他の調査地に比べて最も高い（56.3％）ことである。つまり、全体としては過去から現在にかけて意識が変容した者が多いということである。加えて、過去も現在もアイヌであることに肯定的な意識も否定的な意識も持っていない「どちらでもない」意識である者が各年齢層で５人ずつ（計 15 人）存在していたことである。

多くの人が子ども期にアイヌであることを理由としたいじめや差別を経験しており、肯定的なエスニック・アイデンティティを持ちづらい状況におかれていた。意識の変容をもたらした背景には、第１に、アイヌ文化保存会やアイヌ協会での文化活動がある。保存会で歌や踊りを「学習」する経験を経て、学校などでアイヌ文化を子どもたちに伝えるという教育する立場や、踊りや歌、ムックリなどのアイヌ文化を道内外や海外でも披露する立場になることを通して、「プレゼンター」としての役割を獲得していた。また、アイヌ三大祭りにおいてカムイノミなどの祭祀活動を目にしたり携わったりすることで、「アイヌで良かった」という気持ちが醸成されている。第２に、こうした活動には参画していない者のなかにも、「今の生活の中でできる昔やってたこと」（青年層・男性）として、カムイノミをしたりアイヌ料理をつくったりすることを日常生活のなかで自然に行うことで、エスニック・アイデンティティが生み出されていた。第３に、阿寒湖畔で観光産業の担い手となり、アイヌがマイノリティではない地域で、アイヌであることを隠さずにむしろ「アイヌ性」ともいうべきものを強調するなかで、アイヌとしてのエスニック・アイデンティティを表出できるようになった者も見られた。しかし、本来、踊りや歌は「神様にみせるもの」（青年層・男性）であるとする立場もあり、アイヌの伝統文化とエスニック・アイデンティティのあり方はアイヌの人々

の間で必ずしも一致していないといえる。第四に、露骨な差別やいじめに遭い、それに対抗し強い抗議をしたことを契機として、アイヌであることを開示し、前向きなエスニック・アイデンティティを持つようになった者もいた。

一方で、子ども期のいじめや差別の経験を払拭するには至らないものの、現在は子ども期のような露骨ないじめや差別がないために、「どちらでもない」意識になっている者も少なくない。こうした状況下では、なんらかのアイヌ文化活動に携わることがなければ、積極的なエスニック・アイデンティティを持ちづらい状況にある。しかしながら、文化活動に携わっていたとしても、そこにエスニック・アイデンティティを付与する機会を持たなければ、アイヌの伝統文化活動は形骸化していってしまうだろう。

参考文献

Giddens, A., 2001, *Sociology*（*4th ed.*）（Cambridge：Polity Press）. 松尾精文他訳, 2004,『社会学』而立書房.

北海道経済部労働局, 2013,「平成 25 年度　人材育成のための主な取組について」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/rkr/h25jinzaiikuseiomonatorikumi.pdf

小内透・長田直美, 2012,「アイヌとしてのアイデンティティの形成と変容」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 169－181.

新藤こずえ, 2013,「エスニック・アイデンティティの諸相」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 30　新ひだか町におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 51－67.

――――, 2014,「アイヌとしての意識とアイヌ文化の経験」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 31　伊達市におけるアイヌ民族の現状と地域住民』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 42－61.

上山浩次郎, 2012,「エスニックな社会運動への参加と意識――アイヌ協会がもつ生活上の意味」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告　その２　現代アイヌの生活の歩みと意識の変容――2009 年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書――』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 183－193.

（新藤こずえ）